



TITLE:

# ヒューム道徳哲学における認識論的基礎

AUTHOR(S):

林, 誓雄

---

CITATION:

林, 誓雄. ヒューム道徳哲学における認識論的基礎. 実践哲学研究 2006, 29: 25-45

ISSUE DATE:

2006

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/59249>

RIGHT:

# ヒューム道徳哲学における認識論的基礎

林 誓雄

はじめに

ヒューム(Hume, D. 1711-76)の主著『人間本性論(*A Treatise of Human Nature*, 1739-40)<sup>1</sup>』は3巻だてで構成されている。その中でも特に道徳論をあつかった第三巻「道徳について」は、その冒頭にある「告知」において述べられているように、第三巻を単独で読んだとしても、その内容を理解することが可能とされる。こうしたヒューム自身の記述の影響もあってか、これまでのヒューム道徳哲学研究は、そのほとんどが第三巻のみを用いた考察に終始し、『人間本性論』の他の巻が用いられるとしても、感情や共感(sympathy)原理の説明がある第二巻「情念について」の導入にとどまることが多い<sup>2</sup>。

しかしながら、『人間本性論』第三巻における道徳判断や道徳感情についての議論は、第一巻における我々の“判断”の仕組みについての込み入った議論、及び第二巻における“感情”についての詳細な議論を前提にした上で展開されている。それゆえ、第三巻「道徳について」を十全に理解しようとするならば、『人間本性論』第一巻及び第二巻での議論を十分におさえておく必要があると考えられる。

そこで本稿では、ヒューム道徳哲学における様々な問題に足を踏み入れる前に、それらの諸問題を考察する際に見落とすことができないと考えられる基礎

---

<sup>1</sup> 『人間本性論』からの引用・参照は、Selby-Bigge 版[1978]、及び Norton 版[2000]の両方より行う。略号として T を用い、初めに Norton 版の巻号、章番号、節番号ならびに段落番号をアラビア数字で順に付し、次に Selby-Bigge 版の頁数を SBN という略語の次に付している。日本語訳は林によるものだが、適宜大槻訳及び木曾訳を参照した。

<sup>2</sup> 例えば、Harrison[1976]、Mackie [1980]などが挙げられる。

的議論を押さえておきたい。すなわち本稿は、ヒューム哲学体系の最基底を語っているとも言える『人間本性論』第一巻「知性について」における議論を検討する。具体的に言えば、ヒュームが「信念(belief)」の議論を中心として展開した我々の“判断”の仕組みを解明する<sup>3</sup>。

本稿における論の運びは次の通りである。まず第一章において、ヒューム哲学において極めて重要な位置づけを与えられている「信念」について分析する。次に第二章において、『人間本性論』第一巻における“判断”の仕組みを考察する。本稿では特に、これまで事実判断についての考察においても道徳判断についての考察においても、ほとんど言及されることがなかった「一般規則(general rule)」というものに着目し、“判断”の仕組みを「一般規則」が織りなす「信念」の程度増減メカニズムとして描いてみたい。

## 1 『人間本性論』における信念

ヒュームは、我々が因果推理を行うときに思い抱く信念を、「現在印象(impression)と関係する生き生きとした観念(lively idea)」と定義する(T 1.3.7.5; SBN96)。信念は、心に現れる知覚(perception)の中で、観念に分類されながらも、その観念のコピー元である印象にあるのと同じような「勢力と活気(force and vivacity)」を持つものである。信念は、我々の心に影響を及ぼし、我々の意志や情念を触発する。そして道徳の場面においては、信念が道徳的感情の発生に影響を及ぼし、それが行為遂行へとつながることになる。

信念の構成要素を、観念の「勢力と活気」として捉える点は、他の思想家には見られないヒュームに特徴的なものであろう。とはいえ、ヒューム自身も困惑しているように、その説明は一筋縄ではいかない。ヒュームの困惑ぶりは、

---

<sup>3</sup> 感情についての議論をはじめとする他の議論については、紙幅の都合上、別の機会に譲らねばならない。

彼が『人間本性論』「付録」において、信念についての補足を数多く書き足したところに見てとることができる。では、ヒュームが四苦八苦して説明に努める信念は、「付録」におけるヒュームの説明を踏まえると、どのような構成要素を持つものとして整理し直せるだろうか。本章では、信念の構成要素をまとめ、次に信念の真偽区別について考察する。

## 1.1 信念の構成要素

ヒュームは、心の直接の対象である知覚を、印象と観念とに分け、両者の相違を、それらが意識に現前する際の「勢力と活気」の程度に置いている。この区別は、観念間の差異を示す場合にも用いられる。つまり、「空想(fancy)に現れる観念」と、「信じられている観念」との違いは、「勢力と活気」の程度にあると言われる(T 1.3.7.5; SBN96)。しかしながらヒュームは、信念の本質を「勢力と活気」に置く自らの理論を不服とし、『人間本性論』「付録」において修正を施している。そこでは、「信念が単なる思念とは異なる、ある特殊な感じ(feeling)に他ならない(T Appendix.3; SBN624)」と述べられる。『人間本性論』の訳者でもある木曾好能は、この「ある特有の感じ」が、信念の内在的な特徴ではなく、信念がもつ意志や情念への影響力であると指摘する<sup>4</sup>。木曾の指摘は、「確信と保証の対象である思念(notion)が、空想家の節度のない怠惰な夢想よりも、より確固としており、より堅固であり、…、一層の勢力をもって我々を打ち、我々に一層現実的に現れる。心はそれらの思念を一層しっかりと把握し、それらによって一層動かされ動揺させられる(T Appendix.3; SBN624-5)。」とヒュームが述べる箇所を根拠としている。本稿は、この箇所を根拠とする木曾の指摘を支持する。この木曾の指摘を踏まえて、本稿は信念の要素の一つである「勢力」が、「意志や情念への影響力」を示唆していると解釈する。さらに本稿は、ヒュー

---

<sup>4</sup> 木曾[1995]pp.543, 545

ムが「付録」で付け加えている要素として、「勢力」以外にもう一つ、「心の作用(act of the mind)」というものを指摘したい。

ヒュームは『人間本性論』本編において、一貫して信念の本質を「勢力」と「活気」で説明していた。しかしながら、「付録」の修正では、「勢力」と「活気」という表現が影を潜め、代わりに「よりしっかりとした把握(faster hold)」、「より確固とした把握(firmer hold)」「安定した思い抱き(steady conception)」「より確固とした思い抱き(firm conception)」などの表現によって、信念の本質が説明されるようになる(T Appendix.3-9; SBN624-7)。これらの表現の出現は、信念自体が持つ内在的特徴[活気]や、情念や行為への影響力[勢力]とは異なる、別の何らかの要素を、ヒュームが強調している証と考えられる。

ヒュームの「付録」における説明の変遷に関しては、Luis E. Loeb が興味深い解釈を提示している。Loeb によると、ヒュームは信念を説明する際に、vivacity、vividness、intensity、liveliness などの群と、firmness、solidity、steadiness、fast などの群とを、置き換え可能なものとして用いている。しかしながら、ヒュームの信念理論を整合的に解釈するためには、上記二群の間の絡まった縄を解く必要がある<sup>5</sup>。Loeb の解釈では、上記二つの群は区別して考えられねばならない。

このような Loeb の分析を、本稿は支持する。というのも、ヒュームが「付録」において訂正を差し挟む箇所において、Loeb の分析における二つ目の群、すなわち steadiness に類する群が明示的に出現するようになるからである。

同意される観念は、空想のみが提示する虚構的な観念とは、異なって感じられる。この異なる感じを、私はより優った、勢力、活気、堅固さ<sup>6</sup>(solidity)、確固たること(firmness)、あるいは安定性(steadiness)と呼んで説明しようと努めているのである。(T 1.3.7.7; SBN629)

---

<sup>5</sup> Loeb [2002] pp.65-6

<sup>6</sup> ボールドは筆者の強調。以下同様。

さらにヒュームは上記引用のすぐ後で、このように多様な言葉を使用する自分の意図が、現実的なもの(reality)を虚構よりも一層我々に現前するものとし、現実的なものを思惟においてより重要なものとし、さらに情念と想像力に対する一層大きな影響力を現実的なものに与えるような、「**心の作用**」を言い表すことにあると説明する(ibid.)。この「心の作用」については、次のようにも語られる。

この[信じるという]心の作用(this act of mind)は、未だかつていかなる哲学者によっても説明されてこなかった。それゆえに、私にはこの心の作用について自分の仮説を提案する自由がある。その仮説とはつまり、この**心の作用が、強く安定して何らかの観念を想い抱くこと**(strong and steady conception of any idea)に過ぎない、という仮説である。(T 1.3.7.5n; SBN97n)

この引用では、信念が「勢力」と「活気」という点ではなく、「観念を想い抱く仕方」という点で説明されている。そして、「心の作用」と、観念が持つ「勢力」と「活気」とは、別個のものである<sup>7</sup>。したがって、心が「観念を想い抱く仕方」である「心の作用」を、「勢力」と「活気」に次ぐ、信念の三つ目の要素としてヒュームが提出しているものと考えられるのである<sup>8</sup>。

では、「勢力」及び「活気」と「心の作用」とは、それぞれがどのようにかわり合いながら信念を構成していると考えられるだろうか。とりわけ、「心の作用」は、我々が信念を抱く際にいかなる役割を担うと考えられるだろうか。

---

<sup>7</sup> 木曾も同様に、信念における観念の思念に伴う「活気」と、因果的観念連合一般に伴う内的な反省の印象である「心の移行の被決定性の印象」とは、全く別個のものであると指摘する(木曾[1995]p.546)。

<sup>8</sup> 次のヒュームの言明は、この解釈を裏付けるものと考えられる。「**信念**とは、我々の観念の性質と秩序にあるのではなくて、**観念が想い抱かれる仕方**(the manner of their conception)と、**観念の心に対する感じ**(their feeling to the mind)にあることは明らかである(T.629/1.3.7.7)。」この箇所ではヒュームは、信念の構成要素を、観念の心に対する感じ、すなわち観念の「勢力」「活気」と、観念が想い抱かれる仕方、すなわち「心の作用」との、二つの側面から説明している。

ヒュームの定義によれば、信念とはそれと関係する現前する印象から生じる強く生き生きした観念に他ならない(T 1.3.8.15; SBN105)。では、我々はどのようにして強く生き生きした観念を持つようになるのか。そして、この観念の生氣ないし活気はどこに由来するのだろうか。ヒュームの次の引用を見てみよう。

心は、現前する印象によってひとたび活気づけられると、次に、印象から観念への心の状態の自然な移行によって、印象に関係を持つ対象のより生き生きした観念を抱くということが起こる。対象の交替は極めて容易であるので、心は、この交替をほとんど感じず、現前する印象から得た勢力と活気のすべてを保持したまま、印象に関係を持つ観念をいなくことに向かうのである(T 1.3.8.2; SBN99)。

ヒュームによると、我々が強く生き生きした観念を持つようになるのは、印象から観念へ心が自然に移行するからである。そして、信念として想い抱かれる観念の「活気」は、現前する印象に由来するものである(cf. T 1.3.8.15; SBN105)。つまり、上の引用では現前する印象によって心は活気づけられるとされているが、その事態を敷衍するのならば、現前する印象が保持していた「勢力」と「活気」を、信念として想い抱かれる観念へと心が移行させるということを意味していると考えられる。こうした、ある現在印象から観念への心の移行と、心が信念として想い抱かれる観念へ元の現在印象が持っていた「勢力」と「活気」を移行させることを、ヒュームは人間本性という学における一般的な原則として次のようにまとめている。

ある印象が我々に現前するとき、それは、心を、その印象と関係を持つような観念に移行させるばかりでなく、それらの観念に、それ自身の勢力と活気の一部を伝達しもある(T 1.3.8.2; SBN98)。

信念の構成要素のうち、「勢力」と「活気」は、現在印象から信念として想い

抱かれる観念へ**移行ないし伝達される**ものである。とすれば、「**心の作用**」とは、心がそれら「勢力」と「活気」を信念として想い抱かれる観念へ**移行ないし伝達する作用**のことであると考えられる。信念とは、何らかの観念を想い抱くある仕方であると説明されており、その仕方とは「しっかりとした把握」や「堅固な想い抱き」として語られるのだが、そうやって心によって観念が想い抱かれるときに、心は現在印象が元々持っていた「勢力」と「活気」とを、想い抱く観念に移行させることが意味されているのである。本稿は、この「勢力」と「活気」の**移行**を「心の作用」の一部として付け加えることで、ヒュームが説明する信念を十全に理解することができると解釈する。

以上、「付録」を含めた上で『人間本性論』を読み解くと、信念について次のようにまとめることができる。すなわち、(1)観念の活気、(2)情念や意志に及ぼす影響[勢力]、(3)心が観念を想い抱く仕方[心の作用]、これら三つが信念を構成する要素である<sup>9</sup>。さらに、「心の作用」とは、我々が信念を想い抱く際の「勢力」と「活気」を移行させることに関わっていると考えられる。

## 1.2 信念の真偽区別

ヒュームは信念の構成要素を説明するのに四苦八苦している。とはいえ、我々は信念を極めて容易に抱いてしまう。そしてその信念が、常に真であると言われるようなものとは限らない。

生き生きとした想像力が、極めて頻繁に狂気または愚かさに堕して、作用においてそれらに酷似するように、これら両者 [生き生きした想像

---

<sup>9</sup> 本稿における信念の理論は、『人間本性論』におけるものであって、『人間知性の探求(*An Enquiry concerning human understanding*, 1748)]やその他の著作におけるものとの吟味がなされていないことを、あらかじめ断っておく。それについては今後の課題となるが、『人間本性論』における信念についての説明と『人間知性探求』における信念についての説明に、くい違いがあることを指摘したものに、Michael Hodges and John Lachs, 'Hume on Belief'[1976]がある。



と狂気または愚かさ] は、同じ仕方で判断力に影響を与え、全く同じ諸原理によって信念を生み出すということを、述べておいても差し支えなかろう。想像力が血と魂の異常な興奮から、その全ての力能や機能を乱してしまうような活気を獲得する場合には、真理と虚偽とを区別する手段はなくなり、逆に、あらゆるとりとめのない虚構、すなわち[単なる]観念が、記憶の印象や判断力の結論と同じ影響力を持つことで、それらと同じ資格のものとして受け入れられ、それらと同じ勢力で情念に作用するのである。(T 1.3.10.9; SBN123)

このように我々は、信念そのものを分析することから、信念の真偽を区別することができない。では、ヒュームはどのようにして真なる信念と、偽なる信念とを区別するのだろうか。着目すべきは、『人間本性論』第一卷第三部第十節第十段落、及び十一段落に対して、「付録」においてヒュームが以下の書き換えを指示した箇所である。

我々のはちに、詩的熱狂(poetical enthusiasm)と真剣な確信(serious conviction)との類似点と相違点を述べる機会があるだろう。しかし、さしあたって私は、両者の感じにおける大きな相違がある程度、反省と一般規則から生じるということを、述べずにはいられない。(T 1.3.10.11; SBN631)

この引用における「詩的熱狂」を「偽なる信念」、「真剣な確信」を「真なる信念」と読みかえてみよう。そうすると、信念の真偽区別は**反省と一般規則**によってなされる、とヒュームが説明していることがわかる。Nicholas Capaldi は、「“ヒュームの因果信念の分析によっては、合理的な信念から不合理的な信念を区別するための何らの根拠も与えられない” という反論に応答するものが、一

一般規則である」と論じている<sup>10</sup>。また、Walter Brand と Marie Martin は、信念の真偽区別に一般規則が関わることを指摘した上で、各々の議論を展開している<sup>11</sup>。本稿は、先の引用箇所を踏まえ、さらに以上の先行研究を支持し、信念の真偽は、信念そのものによってではなく、一般規則を導入することによって区別されると解釈する。

一般規則は、『人間本性論』第二巻情念論において、「正しい価値(just value)」を定めるものとして説明される(T 2.1.6.9; SBN293-4)。さらに、一般規則は第三巻道徳論においても散見され(T 3.2.2.24; SBN499, T 3.2.9.3; SBN551, T 3.2.12.6; SBN572-3, etc.)、ヒューム哲学を考察する上で、無視することはできない原理であると考えられる。

では、一般規則の特徴、及び一般規則が働く仕組みはどのようなものなのか。一般規則は信念の真偽区別にどのようにして関わるのだろうか。これらの問題を検討するにあたり、次章において一般規則が詳しく説明される第一巻知性論での議論を見ておくことにしよう。

## 2. 一般規則と事実判断

あらゆる判断を下すにあたり、我々は最初の判断を別の判断によって訂正すべきである、そうヒュームは訴える(T 1.4.1.5; SBN181-2)。そして一般規則は、最初に判断を下すときと、その判断を訂正するときとの二つの場面で登場する。そこで本稿では一般規則を、その特徴に従って二つに分けて分析する。そしてこの分析を経た上で、二つの一般規則が我々の信念や判断に影響を及ぼす仕組みについて考察する。

---

<sup>10</sup> Capaldi [1975] p.121

<sup>11</sup> Brand[1992]p.50, Martin [1993] p.225

## 2.1 想像的一般規則

我々は、これまで数多く見受けられてきた出来事をもとに、一般規則というものを作る。仮に現在観察される出来事が、これまで見られてきた事例とは反対であっても、我々は、一般規則の影響を受け、往々にして一般規則に従った判断を下す(T 1.3.13.8; SBN147)。一般規則は経験と習慣に基づいている。習慣が持つ影響力とは、想像力を活気づけることと、我々に対象を強力に想い抱かせることに他ならない(T 1.3.13.11; SBN149)。これら二つの働きにより、因果推理において、現前する印象の持つ「勢力」と「活気」が、想い抱かれる観念へ移行する。この移行により、観念が「勢力」と「活気」を得て、我々は信念を抱く。

さらに、習慣は想像力を惰性させる<sup>12</sup>。想像力の惰性とは、習慣に基づく一般規則が、自身の基づく原理をこえて拡大することを示している(T 1.3.13.10; SBN148, T 3.2.2.24; SBN499)。一般規則によって我々の因果推理は拡大する。このように描写される一般規則を、「ある種の条件の下で、判断ないしは意見の範囲を拡大する想像力の一般化傾向である<sup>13</sup>」とする Hearn の説明は、実に的を射ていると思われる。

ところで、信念の構成要素は(1)活気、(2)勢力、(3)心の作用の三つであることは、すでに第一章で分析した。そして今我々は、習慣を基礎とする一般規則が、(a)想像力を活性化させ、(b)何らかの対象を強力に想い抱かせ、(c)自身の基づく原理を超えて拡大することを確認した。とすれば、信念が抱かれる際に一般規則が我々の心に影響を及ぼすのは、(b)**対象を強力に想い抱かせる働き**においてであると考えられる。

---

<sup>12</sup> ヒュームはこの作用を、他の衝撃の助けを借りずして動き続けるガレー船の惰性作用にたとえて説明している(T.198/1.4.2.22)。Price はこの「想像力の惰性作用」を、「慣性の原理(Inertia Principle)」と名づけ(Price[1940]p.59)、Brand は「想像的補完(Imaginative Supplementation)」と呼ぶ(Brand[1992]p.27)。

<sup>13</sup> Hearn[1970]p.408

一般規則の影響によって、我々は観念を強力に思い抱くようになる。観念を思い抱く仕方、すなわち「心の作用」が強められるということは、それに伴って現前する印象の持つ「勢力」と「活気」が、思い抱かれる観念へより多く移行することを意味する。かくして、信念として思い抱かれる観念への「勢力」と「活気」の移行を促進することを通じて、一般規則は信念の形成に関与していると考えられるのである<sup>14</sup>。

さて、『人間本性論』第一卷第三部第十三節「非哲学的蓋然性について」において登場する一般規則は、性急に作られ、いわゆる偏見(prejudice)の源として描かれる。この一般規則は、正確に同じである対象に対して作用するだけではない。その一般規則を形成したところの対象に類似している対象が現れるときも、この一般規則は作用する(T 1.3.13.8; SBN147)。ヒュームによれば、あらゆる種類の因果推理は、恒常的随伴だけでなく、過去の対象と現在現れている対象との間にある類似にも基づいている。類似の影響により、現在印象から信念として思い抱かれる観念への、「勢力」と「活気」の移行が促進される(T 1.3.12.25; SBN142)。

「勢力」と「活気」の移行の促進は、想像力による諸関係の付加(T 1.4.5.12; SBN237)によっても説明できる。我々人間の心は、随伴が頻繁に見られる対象間に結びつき(union)を見て取ると、その結びつきを完璧なものにしようとする性向(propensity)を持っている。このとき、想像力による「関係」の付加が行われる(T 3.2.3.4n; SBN504n)。観察事例の数が増えて習慣の影響が強まることによって、そして類似の程度が強まることによって、想像力の働きは活性化される。活性化された想像力は、関係付加の働きを強める。したがって、習慣、及び類似の

---

<sup>14</sup>このような、一般規則が観念の「勢力」と「活気」の増減に関わるその仕方について、本稿が解釈の多くを負う Brand[1992]は、さほど注目していない。Brand は、一般規則の影響により「勢力」と「活気」が変動すると述べるに止まる。しかしながら本稿は、一般規則が観念の「勢力」と「活気」の移行に影響を及ぼすことに着目し、この移行が信念の三つ目の構成要素である「心の移行」と繋がっていることを明らかにした点で、Brand の考察をさらに前進させるものである。

程度が強まることで、「勢力」と「活気」の移行が、一層促進されることになる。

以上で考察した点から、一つ目の一般規則は、次のようにまとめられる。この一般規則は、経験によって打ち立てられ、習慣をその基礎とし、我々が因果推理をする際に、現在印象から関連する観念へ「勢力」と「活気」を移行させることに関係する。この「勢力」と「活気」の移行は、類似の影響によりさらに促進される。ここに、一つ目の一般規則の特徴がある。一つ目の一般規則は、「勢力」と「活気」の**移行を促進**する。そして**現前の事物に敏感に反応し、信念を性急に抱かせる**。この性急さの点で、一般規則は偏見の源と言われることになる。

一つ目の一般規則を、ヒュームはしばしば想像力に関連づけて説明する(T 1.3.13.11; SBN149)。そこで、一つ目の一般規則を、**想像的一般規則**[General Rule of the Imagination、以下では GR-I と略記]と呼ぶことにする。

## 2.2 陥る錯誤

GR-I は、人間本性の原理として、我々に深く根ざしている。だが、GR-I から導かれる判断にしか従わないのならば、我々はしばしば誤った推理をしてしまう(T 1.3.13.7-8; SBN147)。誤った推理を引き起こす要因は、次の二つである。一つ目は、類似する対象に対する性急な反応であり、二つ目は、我々の置かれる複雑な状況である。

我々は過去に見た対象との類似を見出すや否や、過去の状況 S の下で形成された一般規則を、類似する現在の状況 S' の下での因果推理へと拡大適用してしまう。だがそのように拡大される推理の中には、本来の原因と結果の筋道から逸脱しているものがある。推理を逸脱させる主な要因は、観察される状況の複雑さである。原因と考えられるものの中には、様々な事情が混在している。その中で、あるものは本質的なもの、すなわち、結果の産出に必要不可欠なもので

あり、別のものは偶然的なもの、すなわち、たまたま本質的事情と随伴していたものである。この偶然的事情の数が著しく多かったり、本質的事情に随伴した出現が頻繁であったりすると、偶然的事情が想像力に及ぼす影響は甚大となる。とりわけ、偶然的事情と、通常は本質的事情から帰結する結果との間に恒常的随伴が見られると、そこに習慣が生まれ、この習慣は想像力に影響を及ぼすことになる(T 1.3.13.9; SBN148)。そして、このような習慣が定着すると、我々は偶然的事情を見ただけで、本質的事情が無くても、日頃見られる結果[観念]を思い抱いてしまう。この観念は、習慣の働きによって「勢力」と「活気」を得て、空想の単なる虚構よりもまさったものとなる。こうして我々は、誤った信念を抱いてしまう(T 1.3.13.9; SBN148)。

誤った信念は、我々の意志や情念に影響し、場合によっては不適切な行為を引き起こしてしまう。それゆえ、我々は誤った信念を訂正せねばならない。あらゆる判断を下すにあたり、我々は最初の判断を別の判断によって訂正しなければならない、とヒュームは述べる(T 1.4.1.5; SBN181-2)。一般規則に従った判断を訂正する目下の場合、我々は原因と結果に関する自分達の判断を規制すべきなのである。この規制とは、ある規則を参照し、当該判断における偶然的事情と本質的事情とを区別し、偶然的事情から推理を引き起こさないようにすることを意味している。こうした判断規制の際に我々が用いる規則として登場するのが、GR-I とは異なる、別の一般規則である(T 1.3.13.11; SBN149)。

## 2.3 知性的一般規則

我々は誤った因果推理を規制することで、最初の判断を訂正する。ヒュームによると、誤った因果推理を規制するために、我々は、最初の判断を導いたものとは別の一般規則の影響を想定しなければならない。この二つ目の一般規則を想定することで、我々は「ある特定の事情 A の協力がなくても、ある結果 C が生み出されることを見出すとき、どれほど事情 A が本質的事情 B と頻繁に随

伴しているとしても、事情 A が本質的事情 B の構成要素ではない」と結論する (T 1.3.13.11; SBN149)。こうした結論へと我々を導く二つ目の一般規則の形成に関して、ヒュームは次のように述べている。

これらの一般規則は、我々の知性の本性と、諸対象に関して我々が形成する諸判断における知性の働きについての我々の経験とに基づいて形成される。(T 1.3.13.11; SBN149)

二つ目の一般規則の形成には、我々の知性が関わっている。そして事実判断において知性の関与を通して形成されるのが、原因と結果を判定するための 8 つの一般規則<sup>15</sup>である。この規則を参照することによって、我々は事実判断においてどれが本当の原因と結果であるのかを知ることができる (T 1.3.15.2; SBN173)。言い換えれば、我々は、二つ目の一般規則を参照し、判断における本質的事情と偶然的事情とを区別するのである (T 1.3.13.11; SBN149)。この区別により、信念の真偽が識別されることになる。つまり、推理が本質的事情から行われていることがわかれば、想い抱かれている信念は真と言われる。逆に、推理が偶然的事情から行われていることがわかれば、想い抱かれている信念は偽と言われるのである。

以上から、二つ目の一般規則は次のようにまとめられる。この一般規則も、GR-I と同じく経験と習慣とに基づいて形成される。この一般規則を参照することで、判断における原因と結果が見極められ、判断における本質的事情と偶然的事情とが識別されるようになる。

---

<sup>15</sup> 原因と結果を判定するための一般規則とは、(1)原因と結果は時空間で近接している、(2)原因は結果に先立つ、(3)原因と結果には恒常的な接合がある、(4)同じ原因から常に同じ結果が起こる、(5)同じ性質を持っていれば、異なる事物であっても同じ結果を生む、(6)類似物が結果において異なる場合は、その事物自体が異なっていることを示している、(7)原因の増減に応じて事物が増減する場合、それはいくつかの異なる結果の複合物と見なされる、(8)ある事物がしばらくの間、何の結果も持たずに完全な形で存在するのならば、それはその結果の唯一の原因ではなく、別の原理による補助を必要とする、以上の 8 つの規則である。(T 1.3.15.2-11; SBN173-5)

ヒュームは、このような二つ目の一般規則の性格を、GR-I と比べて**より包括的**(more extensive)、**恒常的**なものとして特徴付け、判断力や知性にあてはめて説明している(T 1.3.13.11; SBN149)。そこで、二つ目の一般規則を本稿では、**知性的一般規則**[General Rule of the Understanding、以下では GR-U と略記]と呼ぶことにしよう。

## 2.4 反省と信念の増減

「習慣は、我々が反省する間もなく働く(T 1.3.8.13; SBN104)」と言われるように、我々が判断を下すとき、最初に働く原理は習慣である。そして、習慣から導かれた判断をチェック・訂正することは「反省」と呼ばれる。このような判断訂正の仕組みを、二つの一般規則に当てはめてみよう。我々は GR-I に従って最初の判断を下す。次に、その判断を GR-U から導かれる判断によってチェック・訂正する。我々は、あらゆる判断において、事物の本性に由来する最初の判断を、知性の本性に由来する別の判断によって常に訂正すべきである、とヒュームは訴える(T 1.4.1.5; SBN181-2)。では、最初の判断が、別の判断によってチェック・訂正されるとき、我々の心の中では何が生じているのだろうか。反省がもたらす効果について、ヒュームは次のように述べている。

一般規則についての同様の**反省**によって、我々の観念の勢力と活気が増すごとに、我々が自分の信念を増大させてしまうことを防ぐ。(T 1.3.10.12; SBN632、下線は原文イタリック。以下同様。)

我々は一般規則について反省することにより、抱かれている信念が誤ったものと分かる場合には、その信念の増大を抑えることができる。こうした信念増大の抑制は、(1)因果関係の訂正と、(2)反省の遂行それ自体との、二つによって行なわれると考えられる。まずは(1)因果関係の訂正について見ておこう。



GR-I について反省するとき、我々は GR-U を参照し、その判断における偶然的事情と本質的事情とを区別する(T 1.3.13.11; SBN149)。こうした区別をする理由は、偶然的事情から推理を引き起こさないようにするためである。誤った推理を引き起こさないために、我々は、その推理において結ばれている誤った因果関係を切り離す必要がある。GR-U を参照して判断を訂正するとき、我々は誤った因果関係の切り離しを行なっていると考えられる。因果という関係が切り離されることで、現在印象の「勢力」と「活気」が関連する観念へ移行しなくなる。すなわち、「勢力」と「活気」の移行が阻害されることで、我々は信念を抱かなくなるのである。これが、一般規則についての反省によって信念の増大が抑えられる一つ目の仕組みであると考えられる。

## 2.5 反省と心の強さ

我々は GR-I に従った最初の判断を、GR-U に従った別の判断を参照して反省することで、正しい判断を下すようになる。そして、反省の際の因果関係の訂正により、観念への「勢力」と「活気」の移行が阻害されるので、これが誤った信念の増大を抑制することになる。だが、こうした因果関係の訂正だけでなく、(2)反省の遂行それ自体によっても、信念の増大は抑制される。

ヒュームによると、反省が遂行されると、「**心の作用**」が無理強いされた不自然なものになっている(T 1.4.1.10; SBN185)。さらにヒュームは、反省の遂行と形而上学のような難解な議論を理解することとが同じであるとして、次のような説明を展開する。

[形而上学のような難解な]議論が理解されるためには、**思惟の苦勞と努力**とが要求される。この**思惟の努力**は、信念がそれに基づいていところの**感受的感覚**(sentiments)の**作用を妨害**する。(T 1.4.1.11; SBN185)

「心の作用」が無理強いされているという点と、上記引用に見られる“信念に基づく感受的感覚の作用妨害”とを併せて考えれば、反省の作用そのものによって「心の作用」、すなわち観念の「勢力」と「活気」の移行が阻害されることを、ヒュームはここにおいて説明していると考えられる。まとめれば、我々が反省を遂行し、思惟や想像力に努力を強いれば強いるほど、我々の信念の強さは弱まるのである(T 1.3.13.17; SBN153, T 1.4.1.11; SBN186)。以上が、一般規則についての反省によって、信念の増大が抑えられる二つ目の仕組みであると考えられる。

このように、反省を遂行するためには、思惟の努力が必要になることがわかる<sup>16</sup>。ところで、このような思惟の努力を伴う反省を、我々が無限に繰り返すことは不可能である<sup>17</sup>。ヒュームによれば我々の心には、ある決まった程度の活動力(activity)が与えられている。残りのすべての作用を犠牲にしないと、一つの作用において、心がその活動力を用いることは決してない(T 1.4.1.11; SBN186)。心の活動力とは、ヒュームがときに、**心の強さ**(strength of mind) (T 1.4.7.14; SBN272, T 2.3.3.10; SBN418)として描くものと考えられる。我々人間には、思惟の努力を伴う反省を無限に遂行し続けるほどの心の活動力が与えられていない。とはいえ、与えられている限りでの心の活動力の大きさについては個人差があると思

---

<sup>16</sup> 反省には、「過去を振り返る」という要素が含まれていると考えられる。そもそも、心の本性に従えば、我々は時間の継起に沿って観念を配置する。それゆえ過去に視線を向けるよりも、未来へ視線を向ける方が、心にとって自然であり容易である。逆に、視線を過去に向けることは、不自然であり困難である。このことから、反省という、過去に視線を向けるという働きは、不自然で困難であり、未来に想いを馳せること以上に、思惟の努力が求められると考えることができる(T 2.3.3.7.7-8; SBN430-1)。

<sup>17</sup> 我々が反省を続けることで、最初に抱かれた信念は、その「勢力と活気」を漸次的に減らしてゆき、最終的に、跡形もなく消滅してしまう(T 1.4.1.6; SBN182-3)。このような事態をヒュームは、全面的懷疑論(total skepticism)と呼び、この帰結として我々は、判断を停止することになる(T 1.4.1.7-8; SBN183-4)。GR-Iによって我々はときに、誤謬や不合理、不明瞭に導かれる。しかしながら、GR-Uを用いて反省し続けることで、極めて危険でもっとも致命的な結果へと、我々は導かれてしまう。つまり、反省の無限の継続によって、知性そのものすらも完全に覆される上に、哲学や日常生活におけるあらゆる命題に、なんらの明証性も残らなくなる(T 1.4.7.7; SBN267)。ヒュームの懷疑論については、久米の考察に詳しい(久米[2000],[2005])。

われる。ヒュームによると、我々の判断を導く GR-I と GR-U は、時に一方が打ち勝ち、別の時には他方が打ちかつとされ、その優位性は規則自体に置かれない。俗衆(vulgar)は通常 GR-I によって、賢者や哲学者は GR-U によって、導かれることが多いと言われる。そして、どちらの一般規則に導かれるかは、その人物の性格や気質次第であるとされる(T 1.3.13.12; SBN150)。性格や気質の違いということでヒュームが言わんとしているのは、人によって反省を遂行するための心の活動力が異なっているということであると推測される。俗衆は心の活動力の小ささゆえに、GR-I の判断に傾きがちである。それゆえ、俗衆は GR-U を用いて反省する頻度が低く、しばしば誤った信念を持つままであることが多い。逆に哲学者とは、心の活動力が大きい人物のことを指すと考えられる。彼らはそれゆえ、GR-U を参照して反省する頻度が高い。このような、懷疑を遂行できる活動力を多めに備えていることは、間違った信念を抱くことが少ないので、それ自体で評価に値する。このような理由から、ヒュームは「心の強さ」を「徳」と述べていると考えられる(T 2.3.3.10; SBN418)。

## おわりに

これまでの考察から、我々の“判断”の仕組みを、信念の議論を中心としてヒュームがどのように考えていたかが明らかになった。ヒュームは、我々が判断を下すときにはいつでも、最初の判断を別の判断によって訂正すべきであると訴える。この訂正が行われるとき、ヒュームの議論の中に二つの一般規則の働きを見て取ることができる。すなわち、我々が判断を下すときに抱く信念の「勢力」と「活気」を増大させる GR-I と、主として「勢力」と「活気」の増大を防ぐ GR-U という二つの一般規則が働いているのである。そして二つの一般規則は、信念を構成する三つの要素のうち「心の作用」に影響することで、我々が抱く信念の強弱に関わっている。まず、GR-I によって、想像力が活性化し、

対象間に様々な関係を付加する。これにより観念への「勢力」と「活気」の移行が促進される。他方、GR-Uを参照することにより、我々は最初の判断で結ばれている因果関係をチェック・訂正する。その結果、最初の判断が偶然的事情から推理されたものであることが判明すると、その判断における因果関係は切り離される。因果関係が切り離されると、観念への「勢力」と「活気」の移行が阻害される。また反省の遂行それ自体も、「勢力」と「活気」の移行を阻害する。「勢力」と「活気」の移行の阻害によって、信念の増大が抑えられるだけでなく、ときに信念は消滅することにもなる。このように、信念を中心とした我々の“判断”の仕組みは、二つの一般規則が織り成す観念の「勢力」と「活気」の増減メカニズムとして描き出すことができるのである。

本稿における考察は、『人間本性論』第一巻「知性について」のみを取り扱ったものであり、第二巻及び第三巻での議論との関連は検討されていない。したがって、本稿において分析した結果を第二巻及び第三巻における(道徳)感情ないしは道徳判断のヒュームの説明に導入したとき、それが不整合なく当てはまるのかということは改めて吟味されなければならない。このことは今後の課題としたい。だが、ヒュームが『人間本性論』第一巻「知性について」において展開する諸議論は、『人間本性論』の残りの巻のみならず、その後のヒュームの思想を支える基盤であると言ってよかろう。中でも、信念を中心とした“判断”に関する議論は、ヒューム哲学における中核であると言っても過言ではあるまい。それゆえ、本稿においてヒューム哲学の中核をある程度解明したことは、『人間本性論』第二巻及び第三巻における様々な議論を考察する際に、おおいに資するはずである。

## Bibliography

Hume, D. [1739-1740] *A Treatise of Human Nature*. Edited by Selby-Bigge, L.A., 2nd Ed  
Oxford Clarendon Press, 1978

———— [1739-1740] *A Treatise of Human Nature*. Edited by Norton, David Fate. Norton, Mary J. 1<sup>st</sup> Ed Oxford University Press, 2000

(邦訳) デイヴィッド・ヒューム『人性論』1-4 巻、大槻春彦訳、岩波文庫、1948-1952 年；デイヴィッド・ヒューム『人間本性論』第一巻 知性について、木曾好能訳、法政大学出版局、1995 年

———— [1748, 1751] *Enquiries concerning Human Understanding and concerning the Principles of Morals*, Edited by Selby-Bigge, L.A., 3rd Ed, with text revised and notes by Nidditch, P.H. Oxford Clarendon Press, 1975

———— [1748] *An Enquiry concerning Human Understanding*, Edited by Tom L. Beauchamp, Oxford University Press, 1999

(邦訳) デイヴィッド・ヒューム『人間知性研究』斉藤繁雄・一ノ瀬正樹訳、法政大学出版局、2004 年

———— [1751] *An Enquiry concerning the Principles of Morals*, Edited by Tom L. Beauchamp, Oxford University Press, 1998

(邦訳) D. ヒューム『道徳原理の研究』渡部峻明訳、哲書房、1993 年

Árdal, P. S. [1966] *Passion and value in Hume's Treatise*, Edinburgh: Edinburgh University Press

Brand, W. [1992] *Hume's Theory of Moral Judgment*, Published by Kluwer Academic Publishers

Capaldi, N. [1975] *David Hume: The Newtonian Philosopher*, Twayne: Boston

———— [1989] *Hume's Place in Moral Philosophy*, Peter Lang: New York

Harrison, J. [1976] *Hume's Moral Epistemology*, Oxford: Clarendon Press

Hearn, T. K. Jr. [1970] “General Rules” in Hume's *Treatise*, in *Journal of the History of Philosophy*, Vol.8, pp.405-22

Hodges, M. and Lachs, J. [1976] ‘Hume on Belief’, in *the Review of Metaphysics*, Vol.XXX, No.1

Loeb, L. E. [2002] *Stability and Justification in Hume's Treatise*, Oxford: Oxford University Press

Mackie, J.L. [1980] *Hume's Moral Theory*, London: Routledge

Martin, M. A. [1993] 'The Rational Warrant for Hume's General Rules', in *Journal of the History of Philosophy*, Vol.XXXI, pp.245-58

Price, H. H. [1940] *Hume's Theory of the External World*, Oxford: Oxford University Press

木曾 好能 [1995] 'ヒューム『人間本性論』の理論哲学' デイヴィッド・ヒューム『人間本性論』 第一巻 知性について、法政大学出版局、所収

久米 暁 [2000] 'ヒュームの懐疑論と彼によるその解消' 『哲学論叢』 No.27、pp.1-13

(はやし せいゆう 博士後期課程一回生)